

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 楯岡求美

楯岡求美氏の論文「メイエルホリド演出におけるグロテスクの手法について」は、フセヴォロド・エミリエヴィチ・メイエルホリドの20世紀初頭から1930年代にいたる演出活動の特質を、具体的な戯曲とその演出の分析に基づいて論じたものである。メイエルホリドは20世紀前半ロシア最大の演出家の一人であり、その後の世界の演劇に大きな影響を与えた演劇史上極めて重要な存在だが、日本ではこれまである程度の紹介はなされてきたものの、戯曲とその演出の具体的な分析に基づく本格的な研究は先例がほとんどなかった。その意味で、楯岡氏の論文は日本における先駆的な意欲作として位置付けられよう。

具体的に取り上げられている戯曲は、チャーホフの『かもめ』『桜の園』、ブロークの『見世物小屋』、レールモントフの『仮面舞踏会』、オストロフスキーの『森林』、オレーシャの『善行目録』などである。楯岡氏はこれらの戯曲そのものの特質を緻密に分析したうえで、資料の丹念な調査に基づいてメイエルホリドの演出を復元・分析し、戯曲ないし原作が持つ潜在的な可能性をよりはっきり引き出す方向でメイエルホリドが独創的な演出を展開したことを論証した。またこの論文では、メイエルホリドの演出に影響を与えた同時代の様々な文化的コンテクストも視野に入れられ、イタリア仮面即興劇コメディア・デラルテやロシアの民衆芸能との関係も的確に論じられている。

こういった分析を通じて、楯岡氏はメイエルホリドの様々な演出を一貫してつらぬく基本的な手法はモンタージュとファルス（特に道化芝居）が複合した結果生ずる〈グロテスク〉であるという結論を導いた。これはメイエルホリド演劇の本質に迫る、説得力ある明確な論旨として高く評価できる。

審査の過程では、グロテスク、モンタージュ、ウスローヴノスチ（条件性、芸術の約束事）といった基本概念の吟味がやや不十分ではないか、という批判も出され、また注や文献目録の形式に若干不備が見られることが指摘された。しかし、それらの点は本論文の美点を損なうような深刻な欠陥ではなく、本論文を全体として評価すれば、日本における20世紀ロシア演劇研究の分野における重要な一步となる優れた業績であることは明らかである。それゆえ審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に十分値するものであるとの結論に至った。